

胃 集 団 検 診 （ 職 域 ）

動 向

平成15年度の職域における胃検診受診者数は、間接撮影が45,068名（対前年比92.2%）、直接撮影が4,001名（対前年比137.1%）で計49,069名であり、昨年度より2,723名減少した。

事業所や健康保険組合の対象年齢に達していながらも、自ら胃検診を回避している者も見受けられた。その理由として、バリウムに対する嫌悪感と法的に実施義務がないことが考えられる。

当協会では、今年度より最先端技術を結集したデジタルX線装置（CCDR）を搭載した胃部検診車を導入し、巡回検診においても高精度な検診サービスの体制を整えた。

また、要精密検査者に対するフォローアップの受入体制を整備し、受診者にとって安心できる検診の提供に努めた。

X線検査による胃検診の有効性は、十分に証明されていることは言うまでもない。治癒可能な早期がんの発見のためには、全員が年一回、定期的に受診することが大切である。

方 法

平成15年度は胃検診車・施設合わせて職域検診に9台の装置で対応してきた、撮影方法は日本消化器集団検診学会の提唱する前壁二重造影像を取り入れるなど努力し造影剤も高濃度造影剤の選択により、より良い情報量の多い画像の提供も可能になっている、今後更に情報量の多い診断能の高い画像提供に努力して行きたい。また、Aグループへの対応として要精密検査は直接X線装置による精密検査と内視鏡検査による精密検査に分離される、内視鏡検査では生検による最終診断まで可能である。

結 果

受診者数の動向は前年度よりやや受診者数が落ち込んでいるが男女比は例年のごとくである、受診者数の約半数はAグループで、協会で精密検査まで受診する団体である。要精密検査は12.3%でそのうち精密検査を受診した人は18,76人、56.7%の受診率である。受診率が低いのがかなり気に成るところで、せっかく集団検診を受診し異常が認められてもそのまま放置はかなりのリスクを感じる。ここから発見された胃癌は3名で一般的には1,000人で1名の発見率であるから1,876人で3名、0.2%は高率である。未受診者1,430人から癌発見率を予測すると1.5人は更に発見が可能である。また、その他の良性疾患は胃ポリープ及び単発のポリープが294人15.7%と最も多く、これは高濃度造影剤による胃体上部から噴門部にかけての描出能が向上したためと思われる。胃潰瘍及びその瘢痕は80人4.3%、十二指腸及びその瘢痕は156人8.3%を示した。また、直接X線検査受診群は1次スクリーニングを行わずに直接X線検査から受診したグループで4,001人、ここから1名の癌が発見されている。その他の疾患も多数発見されており要精密検査の指示が出たら必ず精密検査を受診してほしい。

関係の集計表は68頁に掲載